

1. はじめに

「頭に石があたった」という文と、「頭に石がぶつかった」という文を比較すると、ほぼ同一の事象を言っている時に、そこに意味の差が感じられる。その差は何に起因するものであるのだろうか。また、「あたる」には、「くじがあたる」などの用法もある。この用法と先の用法はどのような関係にあるのだろうか。本稿では、「あてる・あたる」を「ぶつける・ぶつかる」と比較しながら、適宜、反意語や類似の場面で用いられる語を考慮に入れ考察していく。

1.1. 打撃動詞との比較

国広(70)では、「あたる」を、英語のhitに対応するものとして、「うつなぐる・たたく」とともに、[打撃を与える]という共通の意義特徴をもつ打撃動詞のひとつにしている。そこで、まず、「あたる・あてる」と他の打撃動詞との比較をしておく。

国広は「あてる・あたる」の意義素を次のようにする。

あてる：《あるものをあるものに単に接触させる》(P.132)

あたる：(1)《あるものがあるものに単に接触する》

あたる：(2)《あるものが移動した結果としてあるものに単に接触する状態が生ずる》(P.133)

ここで、「接触」と「打撃」の関係が問題になる。「単に接触する」事が、「打撃を与える」事に含まれるのか。私は以下において、いかなる過程を経ようとも、またどのような結果になろうとも、物と物が接触するならば、その事態を「接触」とよぶ。したがって「打撃」や「衝突」も「接触」に含まれる概念と考える。

今、「あてる」と「たたく」の比較をしておこう。

(1) 石を 壁に あてる。

(2) 石で 壁を たたく。

このように、「あてる」では「AをBに」という形をとり、Aは接触しようとするものを、Bは接触をうけるものを示す。一方「たたく」は「aでbを」という形をとり、aが手段（接触しようとするもの）を、bが接触をうけるものを示す。（以下、Aは「を」または「が」の、Bは「に」のそれぞれ前にくるものを示す。）このような動詞の前にくる助詞の差は、それぞれの動詞の意味の差をあらわす。（1×2）でいえば、「を」があらわすといわれる動作の対象は、(1)が「石」であるのに対し、(2)は「壁」である。これを、「あてる」の方は「石」への、「たたく」の方は「壁」への動作としかえることもできようか。

他に、この二語の違いとしては、瞬間性と力が考えられる。すなわち、「あてる」が瞬間的な場合にそ継続的な場合にそ用いられるのに対し、「たたく」は常に瞬間的な動作である。また、「たたく」では常に「カー杯」など力の強さ（弱さ）をあらわす修飾語をとりうるのに対し、「あてる」では「^ハカー杯 マスクを あてる。」のように、力が関係しない場合がある。これを、「あてる」が瞬間性や力に対して中立的であるという特徴を持つ、と考える。

以上、「あてる」と「たたく」の差を見たが、「ぶつける」と「たたく」の差はどうであろうか。「ぶつける」という語は、具体的な接触をあらわす場合には、常に強さをあらわす修飾語をとりうるし、また瞬間的でもある。このような特徴においては、「ぶつける」は「たたく」などの打撃動詞に似ているといえよう。しかし、「AをBに」という構文となる点は「あてる」に同じである。この文法的特徴の一致は、「ぶつける」と「あてる」との語義的特徴がかなり類似したものであることをあらわす。よって「ぶつける」と「たたく」などの打撃動詞と一線を画すものと考える。

2. 「あてる・あたる」と「ぶつける・ぶつかる」

2.1. 具体的接触の場合

- (1) 石を 頭に あてる。
- (2) 石が 頭に あたる。
- (3) 石を 頭に ぶつける。
- (4) 石が 頭に ぶつかる。

(1)～(4)は、ほぼ同じ状況をあらわしている。ここで、「ぶつける・ぶつかる」の方がより強い衝突をあらわすと感ぜられるかもしれない。私は、それが1.1.に見た両語の特徴の差であると考え。すなわち、「あてる・あたる」が力や瞬間性に対して中立的であるのに対し、「ぶつける・ぶつかる」はそれらの特徴を有するという差である。この差により、次のような表現の差を解釈することができる。

(5) 風が ほぼに あたる。

(6) ? 風が ほぼに ぶつかる。

(7) 冷たく強い冬の風が 荒野に立つ 彼にむかって ぶつかってきた。

(6)はあまり用いられないがもしれない。それは「風」との接触到、力や瞬間性が考えにくいことによる。しかし(7)のように、より強い衝突をあらわすと考えられる時には、その表現は(6)ほどおかしくはない。これは「風」は、移動があり、力などが考えられるからである。次のように、力や瞬間性が問題にならない時には、「あてる・あたる」のみが用いられ、「ぶつける・ぶつかる」は用いられない。

(8) スポットライトを 彼女の顔に あてる。

(9) スポットライトが 彼女の顔に あたる。

(10) * スポットライトを 彼女の顔に ぶつける。

(11) * スポットライトが 彼女の顔に ぶつかる。

(8)～(10)の場合、「スポットライト」の性格が問題になるかも

しれない。すなわち、次のように具体的な移動をとまなめない接触に「ぶつける・ぶつかる」は用いられないという点があるからである。

(12) ズボンに ツギを あてる。

(13) ×ズボンに ツギを ぶつける。

「スポットライト」に具体的な移動を認めるかどうかは問題であろう。しかし、具体的な移動と力・瞬間性という特徴が相反するものとはいえない。実際の世界においては、瞬間的に力を持って接触するには移動が必要になるからである。よって、「ぶつける・ぶつかる」に「移動は必要な特徴ではない」と考えられる。(なお、(12)の場合、「ツギ」にも移動があるといえるがもしれない。しかし、それは実際の現象にとらわれすぎている。「あてる」であらわされるのは「移動」ではなく、「接触」である。とにかく、具体的な物と物の接触・衝突をいう際、「あてる・あたる」「ぶつける・ぶつかる」ともに、「移動」は重要ではなく、「あてる・あたる」では「単に接触すること」が、「ぶつける・ぶつかる」では「衝突する(瞬間的に接触し、そこに力が加わる)こと」が表現される。次の文を比較してみよう。

(14) 頭を 壁に あてる。

(15) 頭を 壁に ぶつける。

(14)では単に接触させるだけ(衝突させる意もあるか?)なのに対し、(15)は頭を忌殺に移動させた結果壁に衝突させることのみをあらわす。このように考えると、(1)~(4)の差は、「石」と「頭」の単なる接触か、「石」の移動の結果の「頭への衝突か」という点にあるとみなすことができる。

上の(5)~(11)でわかるように、「ぶつける・ぶつかる」のAには制限が生じることがあり、「あてる・あたる」と差が生じる。ではBに関して差はあるであろうか。次の例をみてみよう。

(16) ×のぼり電車が くんだり電車に 正面から あたる。

(17) のぼり電車が くだり電車に 正面から ぶつかる。

(18) × 鎌子沖で 黒潮が 親潮に あたる。

(19) 鎌子沖で 黒潮が 親潮に ぶつかる。

(20) この先で 国道が 県道に ぶつかる。

(16)～(19)の場合 A と B がとどに移動して衝突することをあらわす。ここで(16)(18)のように「あたる」は用いられない。この理由を、これらの場面が単なる接触ではなく衝突をあらわすだけであるからと考えることもできようが、それよりも「あたる」の場合 B が固定されたものである必要があるからと考える。(20)の例は(17)(19)に準じて考えてよい。具体的な移動は認められないが、それぞれの流れの衝突と考えることができる。

なお、(17)(19)は、「A と B が ぶつかる」といいかえることが可能である。A と B とがそれぞれ同じように対立・移動し衝突するからであろう。「あたる」にこのような文法的特徴がないのもこの点によると考えられる。次の派生的用法に「あたる」が用いられないのも同じ理由による。

(21) × 意見が あたる。

(22) 意見が ぶつかる。

2.2. 二者択一的な場合

次のような場合、「あてる・あたる」のみ用いられて、「ぶつける・ぶつかる」は用いられない。

(23) 矢を 的に あてる。

(24) 矢が 的に あたる。

(25) × 矢を 的に ぶつける。

(26) × 矢が 的に ぶつかる。

(23)(24)の文は、接触・衝突をあらわすのではなく、A の B に対する二者択一的な関係(命中か否か)をあらわすものである。これらの場合、実際には、「矢」は「的に」つきささっている。「ぶつける・ぶつかる」が用いられないのは、「矢」が「的に」衝突しないから

でもあるが、一般的に二者択一的な場面では用いられないという面が考えられる。これらの点については、3で述べる。

2.3. 対応の場合

以上、具体的な物同士の接触・衝突の場合をみてきたが、AとBの対応をあらわす用法もある。

(27) 今年の子供の日は 日曜日に あたる。

(28) 今年の子供の日は 日曜日に ぶつかる。

(29) 1フランは 55円に あたる。

(30) 55円は 1フランに あたる。

(31) 彼は 私のおじに あたる。

(32) その行為は 不敬罪に あたる。

まず、(27)と(28)の差を考えよう。「ぶつかる」には上でみてきたように、か瞬間性という特徴を持つところから主に衝突をあらわす。このような点が、この語にマイナスイメージを付加する。(27)(28)とまた、「子供の日」と「日曜日」が一致することをあらわすが、(27)が単にその事実を述べているだけなのに、(28)はそれをいやな事態だと思ふ意識が働いている。(29)以下で、「ぶつかる」が用いられないのは、これらの文では、マイナスイメージを付加する場合が考えられず、単にAとBが一致することを述べるだけだからだ。

上の文で注目されるのは、AとBが交換可能なものと不可能なものがあるという点である。(29)は(30)のようになるが、(31)(32)ではA・Bを交換すると文は成り立たない。

(33) *私のおじは 彼に あたる。

(34) *不敬罪は その行為に あたる。

この理由は、さりしないが、交換可能なものでは、AとBともにある程度の幅をもち、どちらを固定してその文は成り立つのに対し、交換不可能なものでは、Aと対応するBのみが固定され、Aをつねに中心に考えなければならぬからだ。

らう。

2.4. その他の用例

「ぶつける・ぶつかる」は、衝突をあらわすところから、攻撃的な意味をもつことである。

(35) 怒りを 政府に ぶつけよう。

この場合、「怒り」だから文が成り立っているが、「喜ぶ」では成り立たない。

(36) *喜ぶの声を 政府に ぶつけよう。

(35) では単なる接触はありえない(?)点より、「あてる」は用いられたい。

これまで述べてきた例は、ほぼその意味をその特徴から知ることができたが、次のように、まだ説明しきれない文がある点はいない。

(37) ミカンが あたる。(くさる、傷がつく意で)

(38) 家の者に あたる。(あたり散らす)

(39) 卵に あたる。(中毒する意で)

(40) 暑さに あたる。

など。これらについては、さらに検討する必要がある。

3. 「あたる・ぶつかる」と「はずれる」

普通、「あたる」の反意語としては、「はずれる」が考えられる。しかし、「あたる」の用例のすべての否定表現に「はずれる」が対応するわけではない。

まず、「あたる」と「はずれる」が反対の意味になる場合をみてみよう。

(1) 矢が 的に あたる。

(2) 矢が 的に あたらぬ。

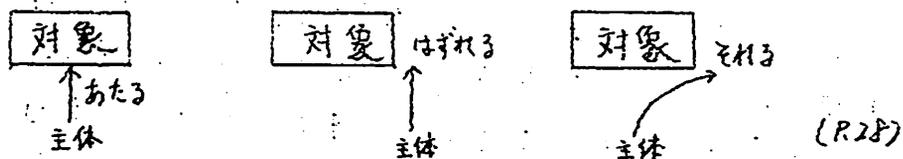
(3) 矢が 的に はずれる。

(2)と(3)が全く同じ意味をあらわすとは言えないにしても、

状況として同じ場面で用いられる、ということはやさう。
また類似の場面では「それる」と用いられる。

(4) 矢が 的を それる。

「それる」と「はずれる」の差を、森田良行('77)は次のように図示している。



「それる」はこの図のように、その経路が問題になる。これに対し、「あたる」と「はずれる」は、その経路は問題ではなく、対象との関係が問題である。

一方、「あたる」は用いられるが、同じ状況の否定表現に「はずれる」が用いられない場合をあげておこう。

- (5) 頭が 壁に あたる。
- (6) *頭が 壁を はずれる。
- (7) 雨が ほほに あたる。
- (8) *雨が ほほを はずれる。

これらの例では、必ずしも命中するか否かが問題になるわけでもない。また、目標があるわけでもない。

以上より、「あたる」と「はずれる」が反意語となるのは、対象に対して命中するか否かの関係という二者択一の場合にかぎられる。(二者択一の場合、接触や衝突以外の物と物の関係(あたる等)であってもよい。)一方、「ぶつかる」には二者択一の結果を(結果的には目標としたものに衝突したとしても)あらわすことはいない。よって、「はずれる」が、「ぶつかる」と真に反対の意をあらわすことはいないと思われる。

- (9) 石が 頭に ぶつかった。
- (10) 石が 頭に あたった。
- (11) 石が 頭を はずれた。

(9)と(11)の関係は、上で述べた点より、視点の差として説明することができよう。すなわち、(9)では、「石」を投げる主体にとって「頭」が目標であるうとなかろうと単に衝突という事態がおこり、たこをあらわすのに対し、(11)では、「石」を投げた者より見た目標に対する関係をあらわす。ここで(10)の解釈が問題になる。単に接触したことをあらわすと考える一方前提として持った目標との関係をあらわすと見解される。「あたる」には、常に前提としての目標があるのかどうか問題である。本稿では、一応、目標を持つ場合持たない場合両方あると仮定しておく。

さらに、「あたる」と「はずれる」が対応する例をあげておこう。

- (12) 芝居が あたる。
- (13) 芝居が はずれる。
- (14) クジが あたる。
- (15) クジが はずれる。
- (16) 天気予報が あたる。
- (17) 天気予報が はずれる。

これらの例にはBがあらわれていないが、いずれも二者択一的であると考えられる。次の例と比較してみよう。

- (18) バチが あたる。
- (19) メバチが はずれる。

(14)、(15)の場合「クジを買う」という前提があり、「クジ」には「あたる」が「はずれる」しかないという条件がある。それに対して、(18)(19)の場合、「バチ」というものが前提としてあげられているわけではない。「バチ」の場合は、「あたる」ことが特徴的であり特出してゐる。その他の場合は平常な状態であり、「はずれる」対象や目標をもっていない。前提として、二者択一的な目標を持つてゐるか否かが問題になるといえよう。

なお対応をあらわす場合、その反意語は「異なる」「違ふ」などが

考えられる。「はずれる」はこの場合の反意語とはならない。また、「はずれる」の反意語となるのは「あたる」のみではない。「ぶつかる」等との対比が必ずとなる。

4. 「あたる」と「ぶつかる」…まとめ

4.1. 「あたる」と「ぶつかる」の意義

ここで、「あたる」と「ぶつかる」の差をまとめておく。

	B	瞬間性	力
あたる	固定された物	±	±
ぶつかる	移動する物で可	+	+

ここにあげたのは、具体的な接触の場合であるが、対応の場合も、それぞれの特徴が形をかえてあらわれる。これらの差の他に、「あたる」には、(A)が、目標とするもの(B)に合致したことをあらわす用法もある。以上より両語の意義は次のようになる。

あたる：(i) Aが、固定されたBに、単に接触する。

(ii) Aが、目標物たるBに、合致したことを示す。

ぶつかる：Aが、Bに、瞬間的に、力をもって接触する。

「あたる」の(i)と(ii)は、必ずしも明確に区別されるものではない。(ii)の「目標物たるB」というのは、動作等の前に前提としておいたものであり、この段階ではその目標との関係のみが問題になる。一方(i)では、前提があるうとなかろうと、接触ないし対応があったことを示す。したがって目標物を前提としてもち、結果的に接触する場合などにおいては(i)と(ii)の区別は不明確になる。いずれにしても、(i)と(ii)の差は前提があるか否かにかかっており、「はずれる」が反意語たりうるか否かもその点にかかっている。なお、「ぶつかる」において、(i)と(ii)の区別は不明確になる。いづれにしても、(i)と(ii)の差は前提があるか否かにかかっており、「はずれる」が反意語たりうるか否かもその点にかかっている。なお、「ぶつかる」において、(i)と(ii)の区別は不明確になる。いづれにしても、(i)と(ii)の差は前提があるか否かにかかっており、「はずれる」が反意語たりうるか否かもその点にかかっている。

上では、「あたる」と「あてる」、「ぶつかる」と「ぶつける」の差は別々

なり。実際用いられる際にはどちらか一方に定ま、ている場合も多いが、それによって自動詞と他動詞に主要な意義の差があるとは考えられぬ。よって、ここであげた差・特徴は共通であると解釈される。

4.2. 「ぶつかる」について

ここで、森田(17)の「ぶつかる」の説明について考えてみよう。森田は、「あたる」と「ぶつかる」の違いを「当たる」は一方だけの作用で、「接触作用が、それたりずれたりせず、正しい場所で行われる」という意識。それに対し「ぶつかる」は、ずと先へと進んでいくはずのところを、途中で障害物が立ちほだがり、激しく衝突する作用をいう」(P.29)とする。さらに「ぶつかる」については、「壁にぶつかる」も、衝突と、進行への抵抗障害、二つの意識の上になり立っている」(P.29)とし、

(1) 一回戦から 強い相手に ぶつかった。

という文もこの意識で解釈する。しかし、「進行への抵抗障害」という意識は、「ぶつかる」の意味記述に必要な特徴であるうが。

(2) 一回戦から 強い相手に あたった。

ともいいうる。(1)においては、「ぶつかる」のマイナスイメージによって解釈できよう。「壁にぶつかる」の場合も、「ぶつかる」の衝突という面(「あたる」に比して強く感じられる)から類推できる。よって、「進行への抵抗障害」という点を、「ぶつかる」が「あたる」に対して持つ、積極的な示差的特徴とは考えない。

なお、「あたる」についても前に述べたように、この語が常に「接触作用が、それたりずれたりせず、正しい場所で行われる意識」をもつとは考えない。

5. 「あたる・ぶつかる」の周辺にある語について

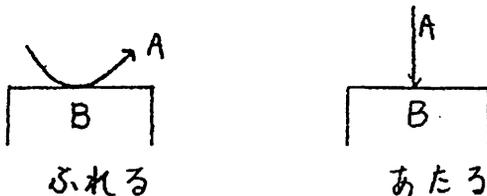
これまで「あたる」の意義を、「ぶつかる」と比較して、「単に接触する」としてきた。しかし、他の接触をあらわす語と比較した

時にはどうなのか。同様に、一応別の語群と解釈されるものでも、同じような場面で用いられる場合がある。その際上でみてきたような「あたる」「ぶつかる」の意義の説明でその差が解釈できるのだろうか。二・三語を例にあげて概観してみたい。

5.1. 「ふれる」

- (1) 毛虫にでも ふれたらしい。
- (2) ?毛虫にでも あたったらしい。
- (3) 私の肩が 彼女の肩に ふれた。
- (4) 私の肩が 彼女の肩に あたった。
- (5) 何かが 足の先に ふれた。
- (6) 何かが 足の先に あたった。
- (7) 外の冷たい空気に ふれる。
- (8) 外の冷たい空気に あたる。
- (9) 都会の空気に ふれる。
- (10) ×都会の空気に あたる。
- (11) 生きた英語に ふれる。
- (12) ?生きた英語に あたる。

「ふれる」と「あたる」において異なる点は多くある。瞬間的であるか中立的であるか、力が加わらないか中立的であるか等。しかし、根本的には、その接触の状態の差であると思われる。この差は直観的には次のように考えられる。



今この直観を確認することはできないが、(3)~(8)のそれぞれの組の差は上のような差で解釈してさしつかえないようである。(1)(2)では、この差にBが小さいという条件が加わり(2)が用いられなくなると考えられる。また、(9)~(12)でも

この差が考えられる。(12)で「あたる」が用いられるとすれば、研究等の場合であらう、ただ単に「英語」の読まれる環境にいたるだけでは「ぶれる」しか用いられない。「あたる」には、「英語」に正面から向かうことが必要となる。(10)が用いられないのも(12)のような正面から接触する場面ではないからであろう。

5.2. 「つける」

国広(70)は、「あてる」と「つける」の差を次のように記述している。

アテル { [物体Aを物体Bに接触させる]
 ◎[目標をそれなりようにする]
 ツケル { ◎[物体Aを物体Bに接触させる]
 [接触後離れないようにする]

(◎印は重点が置かれていることを示す) (P.164)

これまでの分析では、「目標をそれなりようにする」という点、は必ずしも常にあらわれるものではないことを示した。一方「つける」は単に接触を示すだけでなく、接着(又はそれに近い状態)を示すと思われる。よって、ここでは、国広の分析を用いるなら、重点のおかれる場所がそれぞれ逆であると解釈する。

5.3. 「あう・であう」

「あてる」とこれらの語との関係は上でとりあげた語よりも浅いかもしれないが、次のような場合には似た意味をあらわす。

- (1) 先方に あたる。
- (2) 先方た ぶつかる。
- (3) 先方た あう。
- (4) 先方た であう。
- (5) いい窓に あう。
- (6) いい窓に ぶつかる。
- (7) いい窓に あたる。

(8) 不思議な出来事に であう。

(9) 不思議な出来事に ぶつかる。

(1)(2)と(3)(4)を比較すると、(3)(4)が単に先方と面会をすることをあらわすのに対し、(1)(2)では何らかの接触・交渉が行われることを示す。また、(3)と(4)のちがいは、接触と衝突の差を考えることができよう。(5)と(6)の差は(6)の瞬間性より、意外さを考えることができる。(8)と(9)も同様であろうか。

(10) 答が あう。

(11) 答が あたる。

(10)の文では、自ら出してきた答が正解と一致することをあらわすのに対し、(11)では、答が前提となり、その前提が目標たる正解と一致することをあらわすといえよう。

6. 最後に

一応以上で考察を終えるが、上の分析だけでは多くの用法を持つ「あたる・あてる」の意義は説明しきれないかもしれない。また、別の語群との比較も必要であろう。これらの点については、今後の課題とした。

参考文献

国立国語研究所

『分類語彙表』 1964 秀英出版

〃

『動詞の意味用法の記述的研究』 1972 秀英出版

国広哲珠

『意味の諸相』 1970 三省堂

森田良行

『基礎日本語』 1977 良以書院

言語経歴： 1955年3月 兵庫県西脇市生，0才～18才 西脇市

18才～22才 静岡県静岡市，22才～ 東京都大田区